

「SVJ ライティング」：高等専門学校高学年学生のための

英文ライティング指導法の提案

“SVJ Writing” : A Proposal for a Writing Method for Students in the Higher Grades in the College of Technology

永井 誠 ¹⁾

NAGAI Makoto

Abstract: This is a proposal for a teaching method in English writing classes, especially for writing of the abstract of the fifth-year students' graduation thesis. The proposal has two aspects - semantic and syntactic aspects. The former is reflected in consciousness-raising on the gap between the English/Japanese ways of setting subject and predicate, and the latter is reflected in presenting the typical patterns of complex/compound sentence patterns and the use of noun clause structures. It is expected that giving systematic instructions in these two aspects contributes to the students' writing skills.

Keywords: graduation thesis, writing skills, consciousness-raising, complex-sentence patterns

1. はじめに

東京都立産業技術高等専門学校(以下「本校」)では英語教育の目標の一つとして卒業論文の梗概を英語で書くことに取り組んでいる。本稿では、昨年度から試行として取り組んでいる「アウトライン・リーディング」指導の成果及びライティング指導に関する先行研究から得られた知見に基づき、卒論梗概という特定目的に特化したライティング指導法を提案したい。

2. 卒論梗概のための英文ライティング力とは

日本における英文ライティング指導研究を概観した諸文献(小池(2004), 小室(2001)ほか)が主な検討課題として挙げているのは、L2ライティングの特徴・能力の獲得・個人差・形式的教育の効果・ライティングのプロセス・評価法...などである。一方、卒論梗概という特定目的に特化したライティング指導を考えた場合、検討が必要なのは(1)各工学分野(コース)における梗概執筆の形式、(和文英訳でなく)自由作文であることから(2)日本語の発想法から英語の表現法への橋渡し、論理的且つ客観的に事実を報告する必要性から(3)英語の統語法における複合文構造の基本パターンであると思われる。

(1)の「梗概執筆の形式」(項目)はそれぞれの工学分野によって

異なるが、研究の背景/目的・手法・得られた知見(実験の場合その結果)・結論・今後の展望などが基本的に必要なものであることに関しては異論はないと思われる。本稿では以下に、(2)の「発想法」と(3)の「統語パターン」に関する具体的な指導法について提案していく。なお、タイトルの「SVJ ライティング」という呼び名は主語 (Subject) 述語 (predicate Verb) 日本語発想 (Japanese way of thinking) から来ている。

3. 指導内容

3.1 日本語の発想法から英語の表現法への橋渡し

卒論梗概に限らず自由英作文の場合、「どう書いたら良いのか分からない」と言って執筆の第一歩が踏み出せないという学生や、書くことはできるが日本語の発想をそのまま英語の単語に置き換えただけの意味の通らない英文を書いてしまうという学生は多い。一般的な、指定された内容(日本文)を指定された形式・表現を用いて英文に直すという練習をしているだけではこれらの困難は克服し難いと思われる。まずは、日本語の発想法から英語の表現法への橋渡しとなるような指導が必要である。

NAGAI(2008)は主語・述語における日英語比較に関する先行研究(安藤(1986), 小寺(1989), 野田(1996), 小泉(2007)ほか)から、自由英作文における指導のポイントとして日英語ギャッ

¹⁾ 東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科

プに関する意識高揚の有効性を提唱した。このアプローチは、(1) 英文の主語・述語の設定に関する、日本語発想に基づく誤りの代表的なパターンや、日本語の発想からはなかなか出てこない英語独特のパターンを明示的に提示し(リスト)、(2)練習問題によって学生に、自分たちが実際に持つ発想法から生まれ得る誤文の不適切さに気づかせ、(3)学生が自由に英文を書く際に常に意識するよう習慣づけさせるといったものである。

資料編 **教材1** はその例で、A(要注意ポイントのリスト)、B(練習問題)を通して、自分の頭の中にある日本語の「～は」「～が」が英文において主語なのか主語以外なのか、それが主語以外の場合何が主語か: 英語独特の無生物主語/仮主語/空主語...などを柔軟に考える習慣をつけさせること目的としたものである。

3.2 英語の統語パターンに関する知識の活用

本校の英語教育目標の一つに「高度な英文の大意を取る」能力の習得が掲げられており、そのために4年次でアウトライン・リーディングの指導を試行している。リーディングのためにここで習得した統語構造(複合文構造)の代表的パターンに関する知識をライティングに活用することが有益である。卒論梗概は学術的・技術的な内容なので、主語と述語が一つの所謂単独文の羅列では不十分である。仮定、付帯条件、経過、因果関係...などを表現するにはそれぞれに適する複合文構造があり、それらを学生が活用できるようにするための段階的な指導が必要である。

資料編 **教材2** は4年次に習得させることを目指している統語パターンのまとめである。次の3.2.1、3.2.2という2段階の練習を経た後、自分が言いたいことを表す英文には[主語+述語]のペアがいくつ必要か、複数必要な場合、どのような組み合わせパターンが適切か、文の中に節を内包させる必要があるか、文/節それぞれの主語・述語はどのような名詞・動詞かを、このような教材を逐一参照して考えさせることが有効である。

なお、本提案において「節」と言っているのは名詞節で、形容詞節はその被修飾名詞と合わせて名詞節の一部として扱い、複合文の主節/従属節や副詞節(=従属節)は全て「文」として扱っている。これらの「節」はそれだけで独立した「文」になり得る一方、名詞節は一つのモノとして「文」の主語や目的語になる「パーツ」であるという点で大きく異なるため、学習者の理解のためには両者は区別すべきであろうという考えに基づいている。特に、名詞節が文の主語の場合に学習者にとって文全体の構造が見えにくいという傾向が顕著であることも考慮している。

3.2.1 第1段階: 主語と述語の基本パターンの習得

3.1で述べた日英語ギャップに関する意識高揚をした上で(さらには同時進行で)、次に行うべきは、英文の基本である[主語+述語]構造を構築するのに適切な名詞と動詞の組み合わせを考え

させる指導である。この段階ではまず[主語+述語]が一つの単独文に絞り、(1)そのままの語順の「基本形」、(2)[述語+主語]という逆の順序になる「there BE 存在文」、(3)[主語+述語+主語]となる「仮主語文(真主語はto～)の三つに関して、主語と述語の設定練習を行う(資料編 **教材3** 参照)。それぞれ2段階で、(1)「骨組み」として主語・述語に適した名詞・動詞を選択→(2)「肉」として目的語・補語・修飾語句を追加して完成、という練習を行うというものである。

3.2.2 第2段階: 文と文(文と節)の組み合わせパターンの選択/構築

適切な主語と述語の組み合わせを考えて正しく意味が通る英文の基本構造を作るという基本的態度を身に付けた後、次に進むのは複数の[主語+述語]ペアの関係づけ(修飾/内包)である。前述の通り、これができないと単独文の羅列しかできないことになり、科学技術系の内容を扱うには不十分である。あるいは、複合文の論理構造を誤解するとメイン文とサブ文の位置を取り違い、原因と結果を逆に書いてしまうといった事態も考えられる。

教材4 は **教材3** の前段の一つ追加して3段階として、(1)文の組み合わせパターンを選択→(2)「骨組み」として主語・述語に適した名詞・動詞を選択→(3)「肉」として目的語・補語・修飾語句を追加して完成、という練習を行うためのものである。

教材5 は、文同士の関係をよりよく理解させるために視覚的な効果を狙ったものである。**教材4** と交互に使用すると効果的であると思われる。

4. むすび: 提案のまとめ

この提案は意味論的側面と統語論的側面の二つを持つ。前者は日英語ギャップに関する意識高揚であり、後者は複合文構造のモデル化である。実際の卒論梗概の執筆以前に事前準備として、上記の意識高揚の練習問題を「ギャップ」の表を意識ながら行い、また、[主語+述語]構造の構築及びその組み合わせの練習をモデル化されたパターン表を意識しながら行うというものである。

実際の梗概執筆においては、それに当たるのが英語教員か専門工学コース教員かの別に関わりなく、以下のように段階的に指導する。

- (1)「自分が伝えたい内容を表現するのに [主語+述語] ペアがいくつ必要かを考えなさい。」
- (2)「日本語の「～は/～が」に当たる要素が英文の主語か非主語かを区別しなさい。」
- (3)「主語でない場合、それは英文の何に当たるか(目的語? 場所?)、また、代わりとなる主語はどんな名詞が適切かを考えなさい。」
- (4)「[主語+述語] ペアを複数用いる必要がある場合は、「文構

造パターンのまとめ」の資料を見て適切なパターンを選び、文の「骨組み」を作りなさい。」

(5)「最後に主語・述語以外の「肉」を付けて文を完成させなさい。」

つまり学生への指導として、それぞれの段階で必要なヒント/アドバイス(場合によっては「答え」)をすこしずつ与えてやれば、学生は少しずつであっても執筆が進行し、全く書けないという事態を避けられ、最終的には書き上げることになる。何よりも、学生が自分で英文の卒論梗概を書いたという実感・達成感が得られ、その後の英文ライティングへの自信となると思われる。

5. 参考文献

- [1] 安藤貞雄. 英語の論理・日本語の論理. 東京:大修館. 1986.
- [2] 門田修平ほか. 英語リーディングの認知メカニズム. 東京:くろしお. 2001
- [3] 門田修平. 英語の書きことばと話しことばのいかに関係しているか. 東京:くろしお. 2002.
- [4] 金谷憲(編著). 英語リーディング論. 東京:河源社. 1995.
- [5] 小池生夫(編). 第二言語習得研究に基づく最新の英語教育. 東京:大修館. 1994
- [6] 小池生夫(編集主幹). 第二言語習得研究の現在・これからの外国語教育への視点. 東京:大修館. 2004.
- [7] 小泉保. 日本語の格と文型 結合価理論にもとづく新提案. 東京:大修館. 2007.
- [8] 小寺茂明. 日英語の対比で教える英作文. 東京:大修館. 1989.
- [9] 小室俊明(編著). 英語ライティング論. 東京:河源社. 2001.
- [10] 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編). 英文読解のプロセスと指導. 東京:大修館. 2002.
- [11] 永井誠. SVK リーディング:高等専門学校高学年学生のためのアウトライン・リーディングの提案. 東京都立産業技術高等専門学校研究紀要第4号. 2010.
- [12] 野田尚史. 新日本語文法選書1「は」と「が」. 東京:くろしお. 1996.
- [13] 松村幹男(編). 英語のリーディング. 東京:大修館. 1984.
- [14] 三上章. 象は鼻が長い. 東京:くろしお. 1960.
- [15] 山口明德. 日本語の論理. 東京:大修館. 2004.
- [16] 吉川千鶴子. 日英比較 動詞の文法. 東京:くろしお. 1995.
- [17] 吉田研作・柳瀬和明. 日本語を活かした英語授業のすすめ. 東京:大修館. 2003.
- [18] Nagai, M. The Effects of Consciousness-Raising on the Gap between the English/Japanese Ways of Setting Subjects and Predicates: A Case in a Free Composition Class. 全国高等専門学校英語教育学会「研究論集」第28号. 2008.
- [19] Rutherford, W. and Sharwood Smith, M. Consciousness raising and universal grammar. *Applied Linguistics*, 6, 3, 274-82. 1985.
- [20] Sharwood Smith, M. Consciousness raising and the second language learner. *Applied Linguistics*, 2, 159-68. 1981.
- [21] Sharwood Smith, M. Speaking to many minds: on the relevance of different types of language information for the L2 learner. *Second Language Research*, 7, 2, 118-32. 1991.
- [22] Sharwood Smith, M. Input enhancement in instructed SLA. *Studies in Second Language Acquisition*, 15. 1993.

資料編

教材1 (日本語と英語の発想法の違いに関する意識高揚)

A 主語と述語に関する日英語間の「ギャップ・ポイント」

(英文を書く際に常に気をつけるべきことのリスト)

- ① 無生物主語 (+ヒトが目的語)
例)「音楽のお陰で僕は幸せだ。」→Music makes me happy.
- ② 「～がある/ない」「～がいる/いない」を表す There BE 存在文 (主語が後ろ)
例)「うちは4人家族です。」→There are four people in my family.
- ③ 「～することは」(行為)について述べる場合の仮主語 it
例)「この問題に答えるのは簡単です。」→It is easy to answer this question.

- ④ 「～が～するということは」(文)について述べる場合の仮主語 it
例)「君が失敗したのは驚きだ。」→It is surprising that you failed.
- ⑤ 時間関係について述べる場合の空主語 it ^{から}
例)「学校に行くのに1時間かかります。」→It takes me an hour to go to the school.
- ⑥ 天候・気温・雰囲気等について述べる場合の空主語 it ^{から}
例)「この部屋は寒いね。」→It is cold in this room.
- ⑦ 能動態／受動態の区別(「驚く」は日本語では能動態だが、英語では受動態(「驚かされる」)
例)「驚いたよ。」→I'm surprised.
- ⑧ 「～は」「～が」:日本語では主語のように見えるが英語では目的語・述語...ほか
例)「人生は一度だけだ。」→You only live once. (述語)
- ⑨ 「～は」「～が」:日本語では主語のように見えるが英語では時・場所等の修飾語句
例)「駅は禁煙です。」→You can't smoke at the station. (場所)
- ⑩ 「～は」「～が」の組み合わせ:「～が」の部分が「～は」の部分に関してその特徴・事情をコメントする。
例1)「彼女は 頭が痛いんです。」→She has a headache.
例2)「ジャズは アメリカが本場だ。」
→America is the home of jazz. / Real jazz comes from America.

B 練習問題 和文英訳の注意点:以下の和文を英訳するとしたら a),b)のどちらが適切か選びなさい。

- 1 「あの映画を見たら悲しくなっちゃった。」
a) I saw that movie became sad.
b) That movie made me sad.
- 2 「ここはどこ?」
a) Where is here?
b) Where am I?
- 3 「問題点は2つです。」
a) The problems are two.
b) There are two problems.

教材 2 (複合文パターンのみ)

主語・述語から見た文構造の代表パターン

(まとめの資料:英文を書く時に必要に応じて参照すること)

A. 単独文

- (1)[S + V] : 基本型
(2)[V + S] : 倒置文 (there BE 存在文, 文体上の工夫)
(3)[s' + V + S] : 仮主語文 (真主語 = to 不定詞～)

B. 節を内包する単独文

- (1)[(S (s) + (v)) + V] : **主部**に節を含むもの
(2)[S + V ((s) + (v))] : **述部**に節を含むもの
(3)[(S (s) + (v)) + V ((s) + (v))] : 主部と述部に節を含むもの
(4)[s' + V + S ((s) + (v))] : 仮主語文 (真主語 = that 節)

C. 複合文：複数の文の組み合わせ（☆は接続詞の位置）

- (1) [S + V], ☆ [S + V] : 単純並列型（接続詞が and や but など）
(2) [☆ s + v], [S + V] : 前置修飾型（サブ文→メイン文）
(3) [S + V], [☆ s + v] : 後置修飾型（メイン文←サブ文）

D. 実質上の複合文（分詞構文）：サブ文の主語と接続詞を省略

- (1) [現在分詞 ~], [S + V] ⇨前置修飾型複合文
(2) [過去分詞 ~], [S + V] ⇨前置修飾型複合文

E. 節を内包する複合文（上の組み合わせ：多数）

具体的例文集

A. 単独文

- (1) [Many researchers at this university are working on the new program.] 基本型

S V

[この大学のたくさんの研究者がその新しいプログラムに取り組んでいる。]

- (2) [There were three printers on the desk.] 倒置文（存在文）

V S

[机の上にはプリンタが3台あった。]

- (3) [It is important to keep the lab cool.] 仮主語文（it=仮主語，真主語=to keep --）

s' V S

[実験室を涼しくしておくことが重要なのです。]

B. 節を内包する単独文

- (1) [(The student who answered the question) is good at math.] 主部に節を含むもの

S (s) (v) V

[（その質問に答えた学生）は数学が得意だ。]

- (2) [The results of the experiment show (that our idea is right) .] 述部に節を含むもの

S V (s) (v)

[実験結果は（我々の考えが正しいこと）を示している。]

- (3) [(What John can do) is more important than (where he is from).] 主部と述部の両方に節を含むもの

S (s) (v) V (s) (v)

[（Johnに何ができるか）は（彼がどこの出身なのか）より大事だ。]

- (4) [It was natural (that the machine broke down).] 仮主語文（it=仮主語，真主語=that 節）

s' V S (s) (v)

[(その機械が壊れた)のは当然です。]

C. 複合文（☆は接続詞の位置）

[Johnは音楽が好きだが歌は歌えない。]

- (1) [John likes music], but [he can't sing]. 単純並列型

S V ☆ S V

(2) [Although John likes music], [he can't sing]. 前置修飾型 (サブ文→メイン文)

☆ s v S V

(3) [John can't sing], [although he likes music]. 後置修飾型 (メイン文←サブ文)

S V ☆ s v

D. 実質上の複合文 (分詞構文)

(1) 現在分詞による修飾 (都会に住んでいるので、～)

Living in the city, [I don't need a car]. ⇨前置修飾型複合文

v' S V

(2) 過去分詞による修飾 (人気作家によって書かれたので、～)

Written by a very popular writer, [the book sells well]. ⇨前置修飾型複合文

v' S V

教材 3 (主語と述語の組み合わせに基づく英文構築の基本)

英文の基本構造分析に基づく文構築(1)

以前に学習した「難解英文の読解法(1)」では、単独文を【主語+述部】のように分析し、それぞれの中心となる主語(名詞)+述語(動詞)の組み合わせを指摘し、文の意味の骨組みをとらえた。今回は逆のプロセスで、ある文(頭の中に持っている漠然とした日本語の意味)を英語で表現するにはどうすればよいのかを、段階的に考えてみよう。

例1:「今夜はシチューだ。」

単純に、日本語の単語→英語の単語に置き換えないこと。意味的に考えて、英語では、主語は「今夜」ではなく「自分たち(家族のメンバー)」、したがって「we」となる。述語は日本語では「～だ」であるが、英語でBE動詞(are)を使ったら「we」との組み合わせから、自分たちがシチューというものであることになってしまう。そうではなく、動作主体が人間であること(その意味関係)を考えれば、その行為は「have」となるはず。さらに、助動詞で意味がふくらまされ、「will～」となる。

①【主+述】の骨組み→「we」+「will have」

②骨組みに肉を付けると→ We will have stew tonight.

別パターン(シチューが出されるだろう:受動態)

①【主+述】の骨組み→「stew」+「will be served」

②骨組みに肉を付けると→ Stew will be served tonight.

例2:「あの学校には大きなプールが二つあるんだ。」

a) プールが「存在」すると思えば「there BE 存在構文」を使う。具体的には There is + 名詞～や There were + 名詞～といったかたちの文になるが、主語は後ろの名詞の部分である。

①【主+述】の骨組み→「swimming pool」+「(there) BE」

②骨組みに肉を付けると→ There are two large swimming pools in that school.

b) 別パターン:英語独特の無生物主語が、なにか(「ある」と言われているモノ)を「持っている」という考え方。

①【主+述】の骨組み→「school」+「have」

②骨組みに肉を付けると→ That school has two large swimming pools.

注意:これらの他に、仮主語/空主語(It)を立てる場合や、何かを強調するための倒置など、様々なパターンがあるので要注意。ようするに「柔軟に」表現することを心がけるのが重要である。

練習問題：言いたい意味を2段階で表現する練習をしよう。ちなみに、言い方のパターンは一通りとは限らない。英文の構造を予想しながら、柔軟に考えること。

- 1) 「ぼくの兄の友達は韓国に行ったことがあるんだって。」※主部に3つの名詞があるが中心となる主語はどの名詞？
 - ① [主+述] の骨組み→
 - ② 肉を付けると→

- 2) 「今日の午後は授業なしだ！」※2通りで
 - ① [主+述] の骨組み→
 - ② 肉を付けると→

- 3) 「この本には面白いことがたくさん書いてあるよ。」※3通りで
 - ① [主+述] の骨組み→
 - ② 肉を付けると→

教材 4 (複合文構築練習①)

英文の基本構造分析に基づく文構築(2)

「英文の基本構造分析に基づく文構築(1)」では単独文レベルで段階的に英文を作った。今回は次の三つの段階で、文を複数使った場合にそれを応用してみよう。

- ① 文と文の関係を考える (主語+述語ペアはいくつか。複数の場合どのパターンで組み合わせるのが適当か)。
- ② 骨組みを作る。(カッコ付けと主語+述語のみ)
- ③ 肉を付けて文を完成させる。

例1 「明日その店が休みなら僕は家にいるよ。」

- ① [★ S + V], [S + V]前置き修飾型
 - ② [★ shop + BE], [I + stay]
 - ③ If the shop is closed tomorrow, I will stay home.
- ※まるごと前後を入れ替えて後付修飾型でも OK→I will stay home tomorrow if the shop is closed.

例2 「ここは昼頃は暖かいけど夕方は寒いよ。」

- ① [S + V] ★[S + V]単純並列型
- ② [it + BE] ★[it + BE]
- ③ It is warm here around noon, but it is cold in the evening.

別パターン (「けど」を強めに)

- ① [★S + V], [S + V]前置き修飾型
- ② [★it + BE], [it + BE]
- ③ Though it is warm here around noon, it is cold in the evening.

例3 「この論文によると彼の理論にはいくつか矛盾があるそうだ。」

- ① [S + V (★S + V)]節内包型 (内容の that 節)
- ② [paper + claim (★discrepancy + there BE)]
- ③ This paper claims that there are some discrepancies in his theory.

別パターン (「~によると」の部分に慣用句を使って)

- ① [S + V]単独文
- ② [discrepancy + there BE]
- ③ According to this paper, there are some discrepancies in his theory.

練習問題 (①型の選択→②骨組み構築→③完成)

- 1) 彼女は Mac 派で僕は Windows 派だ。 ※単純並列 2 通りで
- ① 文と文の組み立ては→
 - ② [主+述] の骨組み→
 - ③ 肉を付けると→
- 2) この実験結果によって我々の理論が正しいことが照明された。 ※節内包文 2 通り：仮主語/無生物主語を使って
- ① 文と文の組み立ては→
 - ② [主+述] の骨組み→
 - ③ 肉を付けると→
- 3) このコンピューターなら作業は 10 分で終わる。 ※単独文 2 通り，複合文 1 通りで
- ① 文と文の組み立ては→
 - ② [主+述] の骨組み→
 - ③ 肉を付けると→

教材 5 (複合文構築練習②)

複合文構造の構築練習：文構造をビジュアル的に理解しよう

1. 記号で表された以下の内容を[主語+述語]の組み合わせ図で表現するように，以下の空白部分に記号を当てはめなさい。

(1) A が B するので C は D する。

[+], [because +].

(2) E が F する時 G は H する。

[When +], [+].

(3) J は K するが L は M する。

[+], [although +].

(4) O は P すると Q が言っている。

[+ say that (+)].

(5) R が S することを T が証明した。

[+ prove that (+)].

(6) U が昨日出会った V は，明日 W するだろう。

[(+ meet) +].

(7) X は，Y することができる Z を知っている。

[+ know (who can)].

2. 以下の日本語の意味を表す英文の骨組みになるように，[+]に主語+述語の組み合わせ，< >に接続詞を入れなさい (※主語の名詞，述語の動詞それぞれの基本形でよい)。

(1) 時間がないからタクシーを使って良いよ。

[< > +], [+].

(2) 時間がないならタクシーを使って良いよ。

[+], [< > +].

(3) 兄は僕が宿題をしている間，テレビを観ていた。

[+], [< > +].

(4) 音楽は好きだけどライブには行きません。

[< > +], [+].